

持來り其儘上より兩側に下ろす（掌は側方より下  
向となり兩側に下ろす）足はつま立て、下ろす  
すゝめく。左手を腰に右手を右上に打ち振りて  
指揮す（食指を出し四指は握る）ること二回  
海をこえく。兩手を胸部より前方へ次に兩側方  
へ（掌を下にし）  
すゝめく。前に同じ

二鬼の大將。内方に向き

赤鬼は。右食指にて前方を指し元位に復す

とてむかなはぬ。四歩後退

金棒。上體を稍前に屈し兩手を體前にて金棒を握  
る如くす

を。にて右肩上に振り上ぐ

ガラリとすてゝ。右足一步踏出し棒を體前に投げ

## 子 供 の 爲 に

出す如く

角を折り。萎れたる様子にて前進す

兩手を。左拳を前下に（肘を少しく曲げて）

ついて。右拳を同様に

あやまつた。上體を屈し元位に復す

家來の鬼も皆出てゝ。食指にて前方左より右へ四  
回に指す

あたまを下げて。掌を下に兩手を前方に出し柔か

に二回少しく下ぐ

あやまつた。上體を前屈す

桃太郎様は。四歩後退

降参く。上體前屈二回

桃太郎軍勢。兩手を振り勇ましく前進す

萬歳々々。拍手して終りに兩手を舉ぐ

廣島三原女師  
附屬幼稚園

米 山 え ん

只一つ一つの單なる細胞が集つて一つの肉塊が出  
來た、そしてそれが人間の型をして生れ出て來た、  
そこに何等の苦しみもないそれは一個の人形に過ぎ

ないと、考へて來ると只たわいもないのであります  
然し然し其の肉塊、其の細胞、細胞内の分子、分子  
中の原子、其の一個を考へて見ますと實に何千年來

の奮闘努力の歴史をもつて居ます、我々の祖宗の血です祖先の肉です、そしてそれは尊い生の流を連続させて居ます、なんで人形あつかひに致されませう。まして自己の生命を無限に存続させ、發展させて行くべき強い慾望と必然の責任とを持つて居ます私共に於てはこの兒の爲、日夜、心膽を碎いて其の養育に其の教育に盡すのは當然の事と存じます。

然るに私共は往々餘りに無雑作の世の親達を見せつけられて心を寒くするものがあります、唯單にわけもなく土人形を弄ぶ感を持ちます、嚴肅な。慎重な、生真面目な、真劍な、用意があるかどうかと云ふ事にいつも疑ひたくなつて來ます、世間普通に生れ出るものに對する用意は何でせう。やれ襦袢よ、初着よ、寢具よ、乳母車よと形にとらはれ眼の先きの事に追はれ又追つて居ます、これも大切な事です忘れてはなりません、然し大きな大きな生をつむむ襦袢なり初着なりが完全に用意されたいと存じます、唯ぼんやりと眺めて居たのでは駄目です、世の父親なり。母親なりが充分に目覺めなくてはなりません。特に母親は受胎の時から其の詳細を觀察して將來に及してやらなくてはなりません、その胎内の反射的

運動から始まつてこの兒の成年までの苦心の日誌文が世に幾等ありませうか。血と肉とを焼き盡す愛撫のあとを記したものが世間に幾等ありませうか私の狭い見界では不幸にして未だ日に接しません、よしあつたにせよ唯八年間か山十年間を書いたに過ぎません、兒の爲に畢生の事業としてやつた母親を見出したう思ひます。

唯育てる事、愛撫する事は誰も世の親にひけは取りますまい然しその十年、二十年の苦心と悶えとをかきつらねるその熱愛を私は望みます。

その兒が二十、三十、になつて其の母親の眞紅の血潮で染め出された自己の成長史を見せつけられた時どんなに感謝させよう、邪道に踏み入らんとする時いかに兒を反省させるでせう實にこの日誌こそその兒の爲孫の爲又その孫の爲に無限の感化を與へて行く寶典であると思ひます。世界の尊き何物にも代へる事は出來ますまい。私はこんな精神の結晶體にはなんの説明も形式も要項もいらぬと思ひます、只その熱烈さ、苦心さが十分に味はれるものであつたらよいと存じますが然し考へましたもの、條道だけ次にかゝげて見ませう。名前は愛撫日誌としました

幾分理想的かも知れません。

愛撫日誌の要項。

(一) 生れ出づるまで

一、母體に關して、

1、身體の健康狀態

a 惡疽の有様

b 諸機能の狀態

c 胎動の狀態

d 食物の好惡

e 其他

11、精神作用

a 感情の狀態

b 知的活動の狀態

c 嗜好

d 其他

二、環境よりの刺戟に關して

1、家庭内の刺戟

a 夫

b 家族

c 其他

11、社會よりの刺戟

a 親族

b 他人との交際

c 社會の出來事

111、自然界よりの刺戟

a 風景

b 空氣

c 溫度

d 濕度

e 天災、地變

(二) 出生

一、誕生

1 出生の年月日時

2 父母の年齢

二、出産狀態

1 出生兒につき

2 母體につき

3 其他

三、其の經過

(參) 成育誌

一、初生兒

1 哺乳狀態

2 便の狀態

3 發育狀態

4 五官狀態

二、嬰兒期

1 生齒狀態

2 匍匐狀態

3 歩行狀態

4 感覺

5 知覺

6 言語の發達

7 偶發事項

8 父母の感想

三、幼兒期

1 身體發育狀態

2 知的狀態

3 感情狀態

4 性質及其の變動

5 行爲

6 偶發事項

7 父母の感想(或は其他の人々)

四、兒童期

1 身體發育狀態

2 知的狀態

3 感情狀態

4 行爲

5 交友

6 性質及其の變動

7 偶發事項

8 父母の感想及訓試

(其他の人々)

## 五、少年期及青年期

1 將來の計畫

2 煩悶に對しての解決

3 處世法

a 父母の過去の反省より將來に及す

b 先哲の名言

c 其他の經驗

4 其他

此の日誌を記す上の用意は最も慎重で又十分の理解の結果を筆にしたのでなくてはなりません其の兒の全生活を赤裸々に記したものであつて又それが一生中の反省、奮闘の資となるものでなくてはなりません、言言、句句、父母の心臓を貫いた愛の血潮でなくてはなりません、よし前途迷霧に包まれて進路を失ひかけた時、失意の結果自己の生を斷絶せんとした時たよるに父母居ませず、冷き墓石をいだいて空しく涙を垂れる時この愛撫日誌を靜かに繕けば父母の聲はしなくても何事かを語るものでなくてはな

りません、行くべき處をはつきりと教へてくれる羅針盤でなくてはなりません、

この日誌はいつ子供の手に移すかそれは父母の膝元を離れて獨り他人の中へはいつて行く時與へたいと思ひます、然し必要の時は度々出して訓誡の資としたいと存じますそして全部を開く事が悪ひ様でありましたら(例へば生れ出づるまでの處)そこだけのは一束にして假に綴じて置きます。

自己をより大きく、より太く、永遠に存続さす爲にはその連鎖である子供の爲に特別の計畫がなくてはならぬと存じます。

### ○ヘツベルの自傳について

次に紹介して居りますヘツベルの自叙傳は、自傳とは申しませんが、彼のゲーテが自分の傳記に「デイヒシツングウントワールハイト、フウソトマコト」と云ふ標題を附けました様に、何處迄が筆者ヘツベル自身の傳記であるかは、種々説もありませうが、それは免に角、私は此の中に畫かれた一人の子供を限りなく面白く思ひました。(譯者……(T.K))